慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 琉球古今記(伊彼普猷著, 刀江書院發行) |
| Sub Title | |
| Author | 松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1927 |
| Jtitle | 史学 Vol.6, No.1 (1927. 3) ,p.143- 144 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 書評 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19270300-0143 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

方面を主として研究せられた』ことである。

明治大正の史學の興隆は、主として、政治的方面にかぎられた舊史學の、狹隘な研究範圍を脱して、國民生活のあらゆる部門を研究對象となすに至つたことをその一特徴とするのであるが、就中、法制史、經濟史のごときは、國民生活の闡明には、最も重要な部門であり、さうしてわが横山先生が、實にその研究の先驅者であり、開拓者であつたのである。而して、先生の法制史關係の遺稿及び材料が、東京帝國大學法制史研究室に寄托せられたのであつたが、不幸にも、かの大震火災によつて、すべて灰燼に歸してしまつた。誠に惜みてもあまりあるものである。しかし、先生のごとき學界の偉人は、その名を永遠に傳ふべきであり、そのためには先生の遺著を刊行することが最良の方法であるのであつて、その著述中、纂輯御系圖、皇位繼承篇、田制篇、又尚古圖錄の如きすでに公刊されたものを除いて、寫本でのみ傳つてゐる食貨志略、田制私考、及び印刷せられた雜誌とはいへ、今日見ることの稀な學藝志林に掲載せられた諸論文を一つに集めて出版したのが本書である。

まづ食貨志略は田制と戸口との二部に分れ、いづれも、上古、中古、近古、近世の四部に亘つて、その沿革變遷をのべられたもの。田制私考は、大化前制地、大化改新制地、白雉改制、令前制地、大寶田令制地、慶雲改定租地、和銅改定制地、口分田、地子田、不三得七、里制、洛陽地制、餘論の十三章に分れて、主として、大古より中世にいたる田制をのべられたもので、日本法制史經濟史の基礎的研究である。附錄として、刑法史略、日本貴族沿革論、日本上古賣買起原及貨幣度量權衡考、日本人種竝良賤の別古代陶器考、本朝古來戸口考、婚禮通考が收められてゐる。その論旨は、時として重複をまぬかれないものもないではないが、いづれも甚だ精緻であり、また往々事物の語原的解釋を試みられたことも特色であり、さうして單に法制經濟の方面のみならず、人類學、考古學、風俗史等にまで及んでゐる。その博學と、趣味の廣さとには、實に驚嘆の外はない。

吾々はかくのごとき偉大なる先人の遺著に接して襟を正うし、さうして吾々自身の學的研究態度を反省しなければならない。

（松本　芳夫）

## 琉球古今記

（伊波普猷著　刀江書院發行）

薩南から臺灣にいたるまで點々として浮べる南島を思ふとき、誰でも一種の詩的憧憬の念をそゝらないものはないであらうが、南島が特に吾々の心をひく所以は、それが單に吾々の詩情に訴へるからではなく、その言語、宗教、或は風習において、古代日本の面影を反映せしむるものがあり、われ〳〵の祖先の生活が現在なほ南島人の生活の中に保存されてゐるからである。從つて近時南島に對する研究と興味とは益々高まりつゝあるが、この時に際して伊波普猷氏の『琉球古今記』を得たことは、南島研究者にとつては大なる歡喜でなければならぬ。伊波氏は自身南島人である關係からも、南島研究の權威であり、殊に南島の萬葉集ともいふべき『おもろさうし』の研究においては、第一人者をもつて許さ

れたる人であるから、氏の論者は一層の重きを加へるのである。而して本書は從來公にされたる論文を集めたものであつて、氏が『一個の南島人として、重に內部から南島を觀たもので、いはゞ南島人の精神生活の一記錄ともいふべきもので』ある。

まづ『孤島苦の琉球』は、數百年間に亘る南島人の重苦しい歷史をのべたものであつて、吾々が單に空想の上に浮べるところのうるはしい南島の姿とは、全く異つた陰慘な現實の面影であり、さうしてかゝる窮狀に陷つたのは、三百年間に亘る島津氏の搾取政策のためであるとなしてゐる。其他『支那の動亂と琉球の態度』や、『空道について』や、『沖繩縣下のヤドリ』や、『舊藩民誓約血判書』のごときは、いづれも琉球の特殊の地位狀態から生ずる苦境についての記述である。しかしながら現在の琉球の窮狀は、ことごとく過去の制度や政策にのみ起因するものであらうか。吾々の氣づかない他の自然的原因がないであらうか。制度の罪はもちろん大なるものであらうけれども、其他に氣候風土のごとき自然的環境の影響についても考察する必要はないであらうか。人間の生活は單に人爲によつてのみ支配されず、吾々のあまり意識しない方面において、どれだけ自然の影響をうけるかわからない。人間の心身に及ぼす氣候の影響の大なることは、米國の地理學者ハンチントン教授等の唱へるところであるが、わが南島人もその特殊の氣候風土の影響を、その性格の上に、ひいてはその生活の上にうけてゐないであらうか。『南島の歌謠に現はれた爲朝の琉球落』『古琉球の歌謠に就きて』『祭式舞踊』『琉球古代の裸舞』『渡琉日記を紹介す』、『京太良詞曲集につきて』などは、南島の藝術、傳說に關する研究であつて、『猿田彥神の意義を發見するまで』、『琉球語の母韻統計』、『琉球語の數詞について』の諸篇とともに、著者の言語學的造詣を示すものである。『琉球史上に於ける武力と魔術との考察』は、その量において書中最も大なるものであつて、かつて本誌第五卷第三號に揭載されたものであるから、こゝに紹介する必要はないが、たゞ氏が武力と魔術との關係を論ずるにあたつて、フレーザーの說をその根據としてゐるけれども、氏の說く琉球史上の文化狀態が果してフレーザーの說く場合の文化狀態と適合するや否やの疑問を起させるが、とにかく興味ある力作の論文である。附錄の『中學時代の思出』もまた、氏自身にとつてのなつかしき記錄であるのみならず、琉球最近世史の一面を物語る貴重な文獻である。南島研究者はもちろんのこと、一般讀書界に對して是非本書の一讀をすゝめたい。（松本芳夫）

## 山の人生（柳田國男著　鄕土研究社發行）

國民史或は民族史は、少くともその用意として全體についての考察を怠つてはならぬにかゝはらず、普通の場合それは多く征服民族の歷史であり、支配階級の歷史である。しかしながらいつの時代においても、支配者のかげには被支配者があり、特權階級の下には非特權階級が存在するのであつて、複合民族からなれる日本においてもまたさうである。今日の日本人が幾多の異種族の混合からなれる事は、すでに學界一般の承認するところであるが、しかしその中心要素たる所謂天孫民族と、他の種族との融合關係